

松江藩における朱子学の移植

——寛政期以降の桃西河のばあい——

森 川 潤*

(受付 2022 年 5 月 16 日)

はじめに

江戸幕府は、寛永（1624～1643）以降、参勤交代の制度化、転封や改易による大名統制、対外封鎖政策の導入によって中央集権的な幕藩体制を確立する。諸藩は、将軍から割りあてられた藩地に家臣団や商工業者が集住する城下町を建設する。参勤交代により、藩主と勤番の家臣は1年おきに江戸と国元のあいだを往来し、江戸の文化や技術、情報を地方につたえる。江戸藩邸には、藩主の妻子のほかに、留守居、江戸家老と呼ばれる重職、幕府や他藩との応接にあたる家臣が常住し、江戸政府を形成する。江戸では、藩主たちと家臣たち相互のネットワークも形成される。かれらには、教養としての儒学の素養がもとめられる。

松江藩は、寛延元（1748）年、6代藩主松平宗衍の時代に荻生徂徠門下の宇佐美瀧水^{しんすい}を江戸藩邸詰の儒者に登用する。江戸勤番や遊学から帰藩した藩士により「徂徠の経学」が国元にも普及する。10年後の宝暦7（1757）年、松江藩は林家塾から桃白鹿^{はくろく}をまねき、国元における藩士のための儒学教育をゆだねる。門人の脇坂義三郎は、明和8（1771）年、24歳のとき白鹿の養子にむかえられ、桃家の「家業」をつぐことになる。義三郎は、3年後には京都、江戸に送りだされ、「諸儒学流」をまなび、遊学の最終段階に林家塾に入門する。義三郎は、のちに号の西河^{せいが}を通名にする。西河は、勤番でおもむいた江戸で異学の禁に遭遇する。寛政2（1790）年6月には大学頭林錦峯と面談し、聖堂儒者として異学の禁に主導的な役割を担った柴野栗山にもあう。栗山は林家塾における養父の後輩であり、京都遊学中の西河の師でもある。

桃西河は、寛政5（1793）年に帰藩し、白鹿のもとで助教をつとめる。享和元（1801）年に白鹿が歿したのち、10年にわたり松江藩校教授として朱子学を講じる。本稿では、西河がどのような学風であったのか、西河が書きのこした『座臥記』にもとづき検討する。

I. 諸儒学流の見聞

桃白鹿は、享保7（1722）年、石見川合村の瘍医坂根幸悦の長男に生まれる。名は源蔵、

* 広島修道大学 名誉教授

通称は大蔵または題蔵、号は白鹿である。14歳のころ、伯父に随行し、東上する。江戸では暦算家の桃東園の養子にむかえられる。そのころ、江戸では「程朱を譏り申候」学派が蔓延していた¹⁾。徠徠の高弟である太宰春台や服部南郭のもとには、門生が蝟集していた。林家の幕府内の地位は凋落の一途をたどる。幕府は、林家一門のほかにも、新井白石、室鳩巢、木下菊潭、服部寛斎などの木下順庵門の儒者を登用する。白鹿は、徠徠派にもひかれるが、徠徠学に嫌悪感をいだく東園のすすめ²⁾により、寛保3(1743)年、松江藩御用商人野崎文右衛門の紹介で神田湯島の林家の家塾昌平黌に入門する。東園は、太宰春台に師事するが、「護門ノ学士ハ経学ハ訓詁ノミニテ、文章ヲノミ専ラトスルユヘ、放蕩無頼ノモノ多シ」³⁾ということを知っていた。

白鹿は、林家4代^{りゆうこう}の榴岡、その子鳳谷のもとで、2代の鷲峰が編成した経科、史料、詩科、文科、倭学科の「五科」⁴⁾をまなぶ。詩文は、儒者にとっては「君子以文會友、以友輔仁」(君子は文化的教養によって友人を集め、友人をもって大いなる徳義向上の手助けとする)⁵⁾ものである。倭学科は、徳川幕府の命による修史事業、『本朝通鑑』などの編纂のために不可欠の科目である。白鹿は、昌平黌在籍中、「林家の珍藏する書籍」を縦覧しながら⁶⁾、朋輩とともに修業にはげむ。白鹿が入門する前後には、関松窓、柴野栗山などが入門する。

白鹿は、宝暦7(1757)年10月、藩主松平宗衍の時代に、松江藩医の荻野春庵の推薦により「儒者」に登用され、宝暦8(1758)年6月、松江に赴任する。白鹿は、「御留守居番組」に組み入れられ、「新知七十石」を給与され、「學授料米廿表銀十枚」により儒学教授を請け

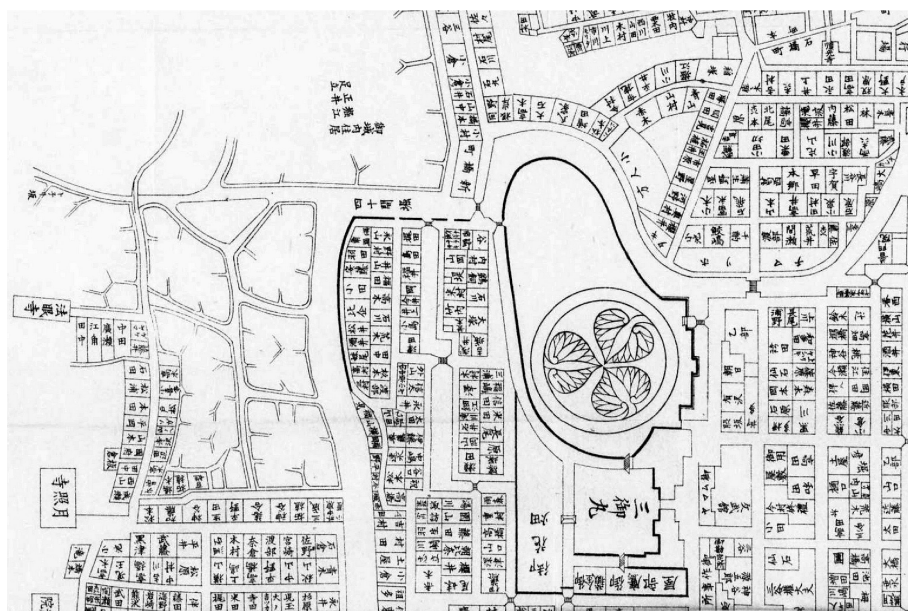


図1 松江藩校 松江城下母衣町⁹⁾

負う⁷⁾。城下母衣町の役宅の敷地にもうけられた茅葺き一棟を教場とし、藩士子弟をうけいれ、「會講」をおこなう。「素讀」は殿町で私塾をいとなむ河合左衛門にゆだねられる⁸⁾。松江藩では、はじめての国元の藩士子弟のために設置された学校である。文明館と名付けられる。文明館は、実質的には白鹿の家塾にすぎない。白鹿の実父坂根幸悦も松江城下に移住し、開業する。

藩主宗衍への進講、上級家臣への定期講釈なども白鹿の職務である。安永（1772～1780）のはじめころには、白鹿がひとりで教授していたが、やがて文教館の入門者が急増したために、白鹿は多忙をきわめる。安永4（1775）年8月には白鹿の門人の原田周助が、白鹿のもとで「弟子」を「助教」するよう命じられる¹⁰⁾。周助の父原田新之丞は、もともと藩医であったが、延享4（1747）年7月、願い出により「還俗」をゆるされ、「儒者」を命じられ、「留守居番組」に組み入れられる。新之丞は、白鹿が着任する10年前には居宅に弟子をうけいていたが、弟子が増加し、「居宅」が手狭になったために、宝暦4（1754）年に「唐人屋敷之内土地」を貸与するよう願っている。「唐人屋敷」は朝鮮人などの漂着民を収容するための施設である。幕府では、林家3代鳳岡は法印に叙されるが、元禄4（1691）年には蓄髪を命じられ、従五位下大学頭に叙任される。林家は、僧侶の仕官系列から脱却し、士列にくみいれられる。松江藩では、幕府の職制と同様に儒者は士列に属する。

原田新之丞の没後、家職をついだ嫡子の文之助が早世したために、宝暦6（1756）年に文之助の実弟周助が家督を相続し、「儒学心懸追々御用立様出精可仕」と命じられる。周助は、明和9（1772）年に「江戸勤番」を命じられ、「大御奥御廣間番」をつとめる。周助は、白鹿のもとで修学するが、遊学した形跡はみられない。江戸では、宇佐美瀧水が松江藩上屋敷の長屋を「講釈場」として藩士に儒学を講じていた。周助は、役務のあいまに瀧水の教えを請うこともできる。周助は、安永4（1775）年7月に帰藩する。翌月、松江藩職制に「教授」と「助教」がくわわり、周助は白鹿の「弟子」を「助教」し、「訓導」するよう命じられる。

明和元（1764）年ころ、松江藩士脇坂十郎兵衛の甥、脇坂義三郎が桃白鹿に「入門」し、「門人」になる。義三郎は、寛延元（1748）年、として城下東郊の西川津村に生まれる¹²⁾。名は世明、通称は義三郎、号は西河である。おなじころ松原基が入門する。加藤勇三郎、のちの園山西山も、白鹿の門人の原田周助に素読をまなび、安永元（1771）年に白鹿に弟子入りする。

義三郎が「少年の時」に読んだ書物のなかに「徂徠派のかながきもの」があった¹³⁾。それは、荻生徂徠の随筆の手沢本をその門人の宇佐美瀧水が校訂し、宝暦12（1762）年に板行した『南留別志』である。江戸では瀧水が藩士の教育にあたっていたが、江戸勤番あ



像肖水瀧美佐宇

図2 宇佐美瀧水肖像¹¹⁾

けの藩士がもちかえったであろう、松江藩の書生のあいだでは、校訂本や写本が流布していた。瀟水は、上屋敷の長屋を「講釈場」として藩士だけでなく、藩外の人びともうけいれる。宝暦 8（1758）年には世子治郷の侍読を命じられる。西河は、おなじころ室鳩巢の『駿台雑話』を読む。『駿台雑話』は、幕府儒官の鳩巢が「後世に至て正學の開くる端にもなり此道のために萬一の助ともなりなは」という思いで書きためたものである。伊藤仁斎、荻生徂徠があらたな学説を唱え、朱子学を批判したのにたいし、「孔孟の道は程朱の道なり」¹⁴⁾と説く鳩巢は朱子学信奉者が尊崇する存在である。安永期（1771～1780）の大坂で朱子学に転向した正学派の人びとも『駿台雑話』を手にし、朱子学の正学化の流れをつくりだす。西河は、思想的に鳩巢に近親感をいだいたという。

白鹿に入門した義三郎、すなわち西河は非凡の才能をみとめられ、明和 8（1771）年11月、白鹿の養子にむかえられ、桃家の「家業」をつぐことになる。白鹿50歳、西河24歳のときである。桃家の継嗣は、文教館の教授職をつがなければならない。西河は、安永 3（1774）年、京都におくりだされる。「田舎ノ學問。京ノ晝寐」¹⁵⁾といわれる。師友にもめぐまれず、書籍もとばしい地方で儒学にとりくんだとしても、昼寝をするようなものである。本格的に儒学をまなぼうとすれば、学問・文化の中心地である三都におもむかなければならない。寛政（1789～1801）のころまで学問の中心は京坂であった。京学の伝統がある京都でも、伊藤仁斎が、延宝 4（1676）年に堀川に塾をひらき、同志会という研究会を主宰する。仁斎は、友人とともに『論語』、『孟子』などの古典を精読し、朱熹の經書の解釈が誤りではないかと思うようになる。文献学的研究により、朱熹が歪曲した古典の真意を探るとというのが仁斎の古義学である。当時、仁斎の篤実な人柄は知られていたが、仁斎は「道徳を實踐として授ける教育」と「それを修得する學問」を重視する¹⁶⁾。徂徠派が寛延（1748～1751）のころまで熱狂的に受けいれられ、その後、急激に衰退したのにたいし、仁斎学は町人社会と公家のあいだにしずかに浸透していた。

西河は、安永 3（1774）年春、皆川淇園、江村北海に入門し、安永 4（1775）年 6 月には柴野栗山に入門する。いずれも、養父白鹿が懇意にしている儒者である。淇園は、享保 19（1734）年、皆川春洞の長男として京都正親町坊に生まれる。京都では、もともと仁斎学が根付いていたが、淇園の少年期には徂徠学が隆盛をむかえていた。淇園は、弟の成章、のちの富士谷成章とともに大井雪軒（蟻亭）、福井藩儒者の伊藤錦里、三宅牧羊などの「宋学系」の儒者にまなぶ¹⁷⁾。宝暦 9（1759）年、京都中立売室町西ではじめて門人をうけいれる。公家、諸侯のなかにも淇園に教えを請うものが多く、門人は3000人におよぶ。西河が入門する 7 年ほどまえの明和 4（1767）年に尾藤二洲が淇園塾に入門する。平戸藩主松浦静山も門人であった。淇園は、言語と易学に関心をもち、のちに開物学を提唱する。開物学を継承するものがないなかったのは、それが「難解な思想」であっただけでなく、儒学思想史に位置づけられる

か否か疑問であるからである¹⁸⁾。淇園は、折衷派に分類される。

江村北海は、正徳3（1713）年、福井藩の儒者伊藤竜洲の第2子に生まれる。兄伊藤錦里、弟清田儋叟^{せいいたんそう}は、ともに淇園と縁がふかい儒者である。北海は、父の友人丹後宮津藩の儒者江村毅庵の養子にむかえられ、宮津藩につかえる。北海は、朱子学を信奉し、安永4（1775）年に致仕すると、京都室町に対梢館をひらく。西河は、多くの門人のなかでも最初期の門人のひとりである。そのころ、北海は元和から安永までの代表的な漢詩を採録した『日本詩選』を編纂していたが、西河はその校書にたずさわる¹⁹⁾。林羅山は、「詩文風流の遊びと道德の実践や修養を一体のもの」とみなす²⁰⁾。西河は、儒者にとっての詩文の意義は理解していた。北海は、天明3（1783）年に『授業編』を板行するが、西河は北海のもとで儒学の学習法・教授法をまなぶ。

西河は、安永4（1775）年6月には柴野栗山に入門する。栗山は、元文元（1736）年に讃岐牟礼村の農家に生まれ、讃岐高松藩儒者の後藤芝山のもとでまなぶ²¹⁾。宝暦3（1753）年5月、19歳のときに昌平黌にはいり、10年あまり林家4代の榴岡とその子鳳谷のもとでまなぶ。白鹿は、栗山より10年前に昌平黌に入門する。栗山が入門したころ、白鹿は聖堂で経書を講じたり、日光山諸院の要請により『春秋左氏伝』を講じたりしていた。宝暦7（1757）年、松江藩儒者に召し出されるまでは林家の儒員であった。白鹿と栗山は、数年間、昌平黌でともにすごした先輩と後輩の間柄である。栗山は、32歳のときに徳島藩に儒者として出仕する。栗山は、高松藩主の侍講としてしばしば参勤に陪従する旧師後藤芝山を白鹿に紹介したであろう。白鹿は芝山とも親交をむすぶ。芝山の四書五経の訓点は、後藤点として知られる。栗山は、明和4（1767）年には徳島から京都にうつり、堀川に塾をひらいていた。翌年には徳島藩の世子侍読として江戸におもむき、明和8（1771）年には京都にもどる。栗山は、西山拙斎、赤松滄洲、皆川淇園などと交遊していた。西河は、栗山が40歳のころ、堀川塾に入門したことになる。栗山は、京学の地において仁斎や徂徠の学説が命脈をたもっていることを悲憤する²²⁾。

仁斎、茂卿、蝸をなし候より天下競唱新説候事ニ成行申候。右兩儒ハ誠ニ名教の罪首と可申候哉。世には豪傑とやらん申候へ共、鄙見には更に豪傑らしき所ハ見受不申、其内仁斎はまだも疑屈ひらきがたく不得已事と奉存候へ共、茂卿ハ全ク好勝心より妄作と奉存候。茂卿新説さへ聞くにたらず候。まして其以外の新奇ヲヤ。

仁斎、徂徠は、競うように「新説」を唱えるが、聖人の教えを踏みにじる奸賊である。世間では「豪傑」と褒めそやすが、「豪傑」らしいところはみられない。徂徠は、勝手気ままに妄説を唱える。徂徠の説も耳をかたむけるに値しない。大坂では、反徂徠の立場から頼春水や尾藤二洲を中心として朱子学を講究するグループが形成されつつあった。西河は、栗山から思想界の動静をきいたはずである。

西河は、京都では高芙蓉に篆刻をまなび、安永 6（1777）年 2 月に帰藩する。西河は、結婚し、安永 8（1779）年 10 月には孝太郎が生まれる。のちの黄園である。白鹿は、50 代半ばになり、やがて西河に教授職をゆずらなければならない。安永 9（1780）年 4 月、白鹿は「諸儒学流」の「見聞」のために西河を私費で江戸に遊学させる。西河は、江戸滞在中、「喰捨三人扶持」を給付される。勤番をおえた原田周助にかわり「御屋敷内読書等可令世話旨」命じられる。周助は、白鹿のもっとも古い門人のひとりである。江戸勤番をおえた周助は、安永 9（1780）年に宇佐美瀧水の孫宇佐美明卿をともない、帰国する。瀧水は安永 5（1776）年 8 月に没していた。明卿は、安永 7（1778）年 閏 7 月、江戸藩邸において祖父瀧水の勤功により儒員に採用されていた。

江戸は、養父白鹿が 20 年も滞在し、昌平黌において朋輩とともに研鑽した地である。江戸では、寛文 3（1663）年に 2 代目鷲峰が幕府からあたえられた上野忍ヶ岡に家塾をもうける。林家塾は、朱子学の普及と林家の増大する公務の一端をになう人材を育成するためにもうけたものである。林家塾は、3 代の鳳岡の時代に上野忍岡の林家別邸用地から湯島にうつり、昌平黌と呼ばれる。諸藩主が「庠序」、すなわち藩校をもうけるようになり、「儒を以て列侯の辟に^{めし}応ずる者」が多くなる²³⁾。昌平黌は、諸藩からだけでなく、市井からも門生をうけ入れ、各地に輩出する。門生は、つよい同門・同窓意識を共有し、全国的な儒学ネットワークを形成する。

藤原惺窩は、程朱学だけでなく、陸王学を参酌し、折衷的な姿勢をとっていた。その門人の羅山は原理主義的な朱子学者であったが、林家 3 代の鳳岡は折衷派に分類されることもある（国史大辞典）。鳳岡のもとでまなんだもののなかには、のちに「程朱を駁す」荻生徂徠、折衷派とみなされる沢田東江、井上蘭台がいる。西河の養父白鹿も鳳岡門である。徂徠の出現により、江戸の学派がはじめて「学芸界の主導権」をにぎる²⁴⁾。「徂徠ノ學」は、享保（1716～1736）のはじめころには江戸だけで流行するが、享保の中期以降、「關－西九－州四－國」まで席捲し、「世ノ人其説ヲ喜ンテ習フコト信ニ狂スルガ如シ」といわれる²⁵⁾。その随伴現象として、儒者のなかに「浮華放蕩」にながれるものがあらわれ、「躬行ヲ務ムル者」が少なくなる²⁶⁾。その後、「宋學」に回帰する流れもみられるが、「程伊物ノ説」、すなわち程朱学、仁斎学、徂徠学を「互ニ取捨スル」「折衷学」を奉じるものが「當時高名ノ儒者十二七八」に達する。惺窩の門人木下順庵に師事した榊原篁洲については次のようにいわれる²⁷⁾。

篁洲在_二當時_一。既_二不_レ好_レ區_二別_{スル}學流_ヲ_一。故每_二講_レ經用漢魏_ノ傳註與_二宋明疏釋_{ト^ヲ}_一。訓詁_ハ則據_リ馬鄭之舊說_ニ。義理_ハ則依_二程朱之心性_ニ。近時_ノ所謂折衷學_{ナル}者。胚_二胎_一於此_ニ。

篁洲は、同門の室鳩巢、雨森芳洲、新井白石、祇園南海とともに木門五先生と呼ばれる。伊藤仁斎と荻生徂徠との中間の世代にあたる。篁洲は、「学流」を区別することをこのまず、

儒家古典の解釈には、漢魏の儒者の注釈と宋明の釈義を併用する。字句の解釈には「馬鄭」の旧説、「義理」、すなわち人のふみ行うべき道については程朱の性理学に依る。「馬鄭」は、中国後漢の經学者の馬融と鄭玄である。馬融は、今古文の両学説の折衷と総合化を企図する。鄭玄は、馬融に師事し、訓詁注釈に専念し、漢代經学を集大成する。篁洲は、折衷派の祖とみられる。折衷派のなかには、蘭台門下の井上金峨、東江門下の豊島豊洲、服部南郭門下の片山兼山のように、仁齋学や徂徠学を遍歴したものもいる。いずれも既成の学問にあきたらず、あらたに学的体系を構築しようという傾向がみられる。折衷派に共通するのは、「(先王孔子の)道=実践倫理」を重視する姿勢である²⁸⁾。

折衷派のなかから、折衷という方法が恣意的な主観性をまぬがれないという意識をもつものがあらわれる。吉田篁墩は、延享2(1745)年に水戸藩医の子に生まれ、立原翠軒、太田錦城、屋代弘賢などと交友する。「中年以後専奉古註疏始倡考拠学又購古鈔本攻勘四于六經而辨其文字同異」²⁹⁾。篁墩は、中年になると、もっぱら古註疏を奉じ、「考拠学」を提唱する。古写本を購ひ、四經や六經を校勘し、文字の異同を識別する。篁墩の校勘学を継承した狩谷棧斎は、清朝考証学の方法を取り入れ、「ある文献の成立、語句の意味、文字の異同等を、他の文献と比較検討し、客観的証拠によって確定する学問の方法」を確立する³⁰⁾。

西河は、儒流が多様化した時代の江戸において、岡部伯固(故完)、萩野信敏、毛利扶揺、豊島豊洲、渋井太室、藍川玄慎、関松窓などの儒者をたずね、教を乞う。いずれも白鹿の旧友であるが、なかには徂徠門流のものもいた。

萩野信敏は、名は信敏または喜内、字は求之、号は鳩谷である³¹⁾。奇人天愚孔平として知られる。信敏は、享保5(1720)年に侍医春庵の子として江戸で生まれる。宇佐美瀧水を松江藩の儒者に推薦したのは、春庵である。桃白鹿を推薦したのも春庵である。信敏は、藩邸内に居住する瀧水のもとでまなぶ。延享元(1744)年、16歳の藩主宗衍のお伽役として初出仕し、以後、御扈從、御者頭格へと士列の階梯をのぼる。信敏は、蘭学者とも親交があり、大槻玄沢の『蘭学階梯』の序文を記す。戯作者滝沢馬琴は、天愚孔平についてしるす³²⁾。

門外他行の時。僅に三四町ゆくと。若黨等をかへし。古き衣装を着かえ。上にハ古き合羽を着し草鞋をはき。草履取只一人を俱して。江戸中をあるきしかば。世の人天狗孔平と異名して志らざる者なし。すべての事に高慢なれば。自から天愚齋と號し。世の人も天狗とはいひし也。

豊島豊洲は、元文2(1737)年に江戸に生まれる³⁴⁾。



図3 天愚孔平³³⁾

豊洲は、宝暦（1751～1764）のころ、江戸八丁堀長沢町で古文辞学を講じていた山県大弼と親交があった。大弼は、明和 5（1768）年 8 月に明和事件に連座したとして処刑される。豊洲も禁錮刑に処せられるが、やがて放免される。豊洲が荻生徂徠門の宇佐美瀧水に師事したのは、放免されたのちのことであろう。豊洲は、のちに沢田東江にまなび、豊洲も折衷派に分類される。西河が豊洲をたずねたのは、安永 9（1780）年以降、徂徠学から脱皮した豊洲である。豊洲は、寛政異学の禁に反対し、異学派五鬼のひとりにかぞえられる。豊洲は、安永 5（1776）年に「儒学」修業のために東遊した園山西山が師事した儒者である。白鹿門下の西河の後輩であり、昵懇の間柄でもある西山は、のちに松江藩校教授になる。

渋井太室は、享保 5（1720）年、下総佐倉に生まれ、江戸におもむき、林鳳岡の門人井上蘭台のもとでまなぶ³⁵⁾。24歳のころ佐倉藩主堀田正亮の侍読にとりたてられるが、同時に林榴岡に師事する。太室は、関松窓、桃白鹿と同様に榴岡門であり、秋山玉山、滝鶴台、細井平洲らとも交わる。太室は、「がくもん みち とく な よう な 學問の道は徳を成し用を作すにあり」という立場をとる。その儒風は、朱子学を軸にした寛容な学風である。

かん い こ がく は ふんりつ おのおのそのみち みち そのがく がく した ふる くちびる こ ひと い どう あらそ
漢より以後學派分立し各其道を道とし其學を學とす、舌を振ひ唇を鼓し人と異同を爭ふ
われ と それとく な よう な じんぎひ いく はじま き し をは
吾は取らざるなり、夫徳を成し用を作す人材を育するに始り器を知るに終る

藍川玄慎は、松江藩医藍川通青の子として江戸に生まれる。伊沢蘭軒の師である目黒道琢に古医方をまなび、長崎に遊学したのち、文化 2（1805）年に松江藩医に登用され、江戸藩邸詰で世子斉恒の側医を命じられる。目黒道琢は、明和 2（1765）年に幕府医官多紀元孝が江戸神田佐久間町に創設した躋寿館の講師である。玄慎は、斉恒の長男斉貴が襲封すると、側医を免じられ、藩士として『延喜式』の校訂にたずさわる³⁶⁾。西河は、松江藩邸において多才な玄慎に出会い、親交をむすぶ。

関松窓は、享保 12（1727）年に江戸に生まれる³⁷⁾。松窓は号、名は修齡、字は君長、通称は永一郎である。折衷学派のさきがけである井上蘭台に師事する。寛延元（1748）年 6 月に昌平黌に入門し、宝暦 7（1757）年 5 月に武蔵川越藩に仕官する。松窓は、昌平黌では白鹿の 5 年後輩である。松窓は、明和 6（1769）年 6 月には昌平黌にもどり、翌年 9 月には「員長」を命じられる。松窓は、のちに「漢宋ニ於テ粗ソノ淵源ヲ究テ折衷ノ學ヲ主張ス」。松窓は、天明 7（1787）年には退塾し、寛政 2（1790）年 6 月には離門を命じられる。松窓は、朱子学を基盤とし、古註と新註を折衷した学風で知られる。

西河は、松窓の「取次」により、天明 2（1782）年 8 月に神田湯島の昌平黌に入門する³⁸⁾。

天明二年 壬寅

八月十一日 松平出羽守殿家中

ゝ（死）桃義三郎

桃源蔵養子

関永一郎取次

西河が在籍したところには、昌平黌でも諸学派が混在していた³⁹⁾。

以前にはよほど有名の人が出て講釈したので、徂徠学もあり、朱子学もあり、陽明学もあり、^{こんにち}今日朱子学で講釈があると明日は陽明説で講釈するというようで、聴く者が適従する所がないから、それで異学禁制ということになったのです。

西河が昌平黌でまなんだのは、林家6代の鳳潭の時代である。もはや原理主義的な朱子学の時代ではない。田沼時代（1772～1786）には、自由な風潮のなかで徂徠学徒がふえる。西河が遊学した時代は、徂徠熱が醒めやらぬ時代であるが、徂徠の学説にたいする批判をとおり、朱子学がみなおされただけでなく、折衷的な学流が生まれた時代でもある。西河は、京都と江戸に遊学し、「諸儒学流」の動静をうかがい、徂徠派の人びとにも面会する。それは、松江藩には、宇佐美瀧水以来の徂徠学の伝統があり、瀧水は「爲人忠臣嚴整」であり⁴⁰⁾、その門下の人びとにも門流の通弊である浮華放縱の風もなかったからである。

II. 正学論との邂逅

安永5（1776）年8月に瀧水が没したのち、その後任をおくことなく、藩校の助教の3人、原田周助、桃西河、園山西山のうちひとりが江戸藩邸で勤仕することになる。西河は、寛政2（1790）年に江戸勤番を命じられ、4月に赤坂御門内の上屋敷にはいる。藩邸では、原田周助にかわり「御屋敷内読書等」を担当する。西河は、同年6月10日、大学頭林錦峯をたずねる。西河が昌平黌に入門した天明2（1782）年8月には、林家当主は林鳳潭であったが、鳳潭が早世した天明7（1787）年に養子にむかえられ、大学頭に補任されたのが錦峯である。錦峯は、信濃小諸藩主牧野康周の三男、明和4（1767）年の生まれである。西河は、林家7代錦峯とは面識はなかった。

西河は、そのとき幕府の申達書と錦峯が書き記した「示諭」を呈示される。同年5月、老中松平定信から大学頭林錦峰、聖堂儒者の柴野栗山、岡田寒泉にくだされたのが「学派維持之儀ニ付申達」⁴¹⁾である。

朱学之儀者、慶長以来御代々御信用之御事にて、已に其方家代々右学風維持の事被仰付置候得者、無油断正学相励、門人共取立可申筈二候、然処近来世上種々新奇之説をなし、異学流行、風俗を破候類有之、全く正学衰微之故二候哉、甚不相濟事二而候、其方門人共之内にも、右体學術純正ならさるもの折節者有之様二も相聞、如何二候、此度聖堂御取締嚴重に被仰付、柴野彦助岡田清助儀も右御用被仰付候事二候得者、能々此旨申談、急度門人共異学相禁し、猶又不限自門他門申合、正学致講窮、人才取立候様相心掛可申候事

「異学」は、「新奇之説」をとえ、「風俗を破候類」、すなわち社会的な倫理性を蔑ろにす

る学説である。「新奇之説」は、朱熹の經書解釈から逸脱した説である。その意味では、朱子学以外の学統学派は、すべて「異学」であるが、公序良俗をそこなうのは徂徠の学説のほかにはない。とりわけその詩文・文学的側面は、「私的な自己解放を放恣に実現させるもの」として熱狂的にうけいられる⁴²⁾。その結果、「儒学体系のなかの大きな柱であったはずの道德の学」が衰退し、社会秩序がみだれる。徂徠学を忌避し、朱子学に回帰する流れもみられるが、折衷的な方法をとるものも多くなる。折衷派にしても、考証派にしても、実践倫理を重視する。

松平定信は、田沼意次が失脚したのち、老中首座につき、田沼政治により弛緩した風潮をたてなおすために幕政改革にとりくむ。定信は、祖父の 8 代将軍吉宗の享保の治を理想とし、「享保の時点の江戸人の倫理性」をとりもどす⁴³⁾ ために、幕臣林家の家塾昌平黌の改革にもとりくむ。定信は、もともと「學文の流儀は何にてもよく候」と考え、「朱子の流をくむもの」は「偏屈におちいり理が過申」という認識をもっていた⁴⁴⁾。にもかかわらず、朱子学を「正学」として認知したのは、それが「學文は聖人をまなぶ」という定信の学問観に合致するからである。

定信は、昌平黌を幕臣のための学問所に再編するために、学識や名望のあるものを幕臣のなかから起用しようとするが、適任者を見いだせない。幕府が全国的に調査し、白羽の矢が立てられたのが在京の徳島藩儒者の柴野栗山である。栗山は、天明 8 (1788) 年に幕府の寄合儒者として招聘される。栗山は、讃岐牟礼村の農家の生まれである。旗本岡田善富の次男寒泉も、寛政元 (1789) 年に幕府儒者に抜擢され、栗山とともに聖堂取締として改革案をねる。「学派維持之儀ニ付申達」はその産物である。申達の骨子は、第 1 に寛政正学派の「正学」⁴⁶⁾ を幕府の正統教学として位置づけ、昌平黌にとりこみ、幕藩体制を思想的に補強する「正学」の「講窮」機関として再編することである。聖堂取締御用は、「新奇之説」をととなえ、「風俗」をそこなう「學術純正ならさるもの」が混入しないよう監視しなければならない。第 2 は、昌平黌を「人才取立」、すなわち幕政の実務をになう人材の発掘・登用する教育機関に再編することである。

西河に提示された「示諭」は、林家が起草し、「門下一統」に呈示したものである⁴⁷⁾。

御当家、開国之初、宋学御取立被成、続而聖堂御建立有之候義、全く風俗正敷相成、人才致成就候様二との御美意ニ有之候、然処近来種々新奇之学流起り、我等門人ニも右軀之学いたし候者有之候様相聞、今度蒙御察度之段於我等も恐入失面目候仕合ニ候、此後ハ門下一統正学致出精、人物



図 4 柴野栗山肖像⁴⁵⁾

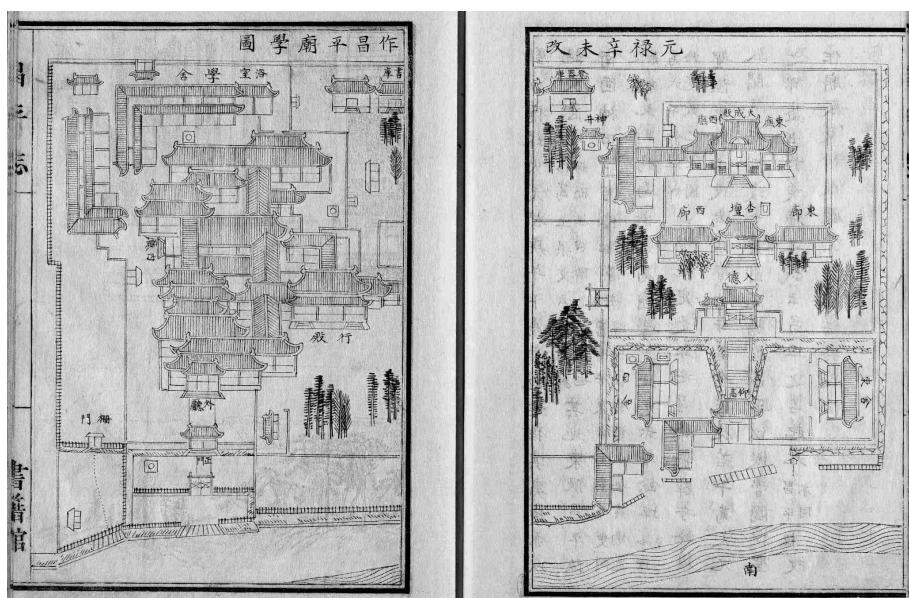


図5 元禄辛未改作昌平廟學舎⁴⁸⁾

相慎候様、急度可相心得候、修業之方儀追々令申聞候

開府以来、林家が宋学を堅持し、聖堂を建立し、孔子および孔門十哲をまつってきたのは、「風俗」をただし、「人才」を育成するためである。ところが、近来、「新奇之学流」がはやり、林家門人のなかにも「新奇之学流」をまなぶものがあるという風聞がある。今後、「門下一統」は「正学」に出精し、言行を慎むよう心得なければならない。

西河は、6月24日付の聖堂学頭の安原三吾と林家学頭片瀬作右衛門の連名の書簡を受けとる。それは、「祭酒様被仰渡候御用之義御坐候間近日之内両啓事宅迄御出可被成」というものである。祭酒、すなわち大学頭林錦峯の伝言をつたえるために、近日中にふたりの役宅をたずねるよう西河に要請する書面である。西河は、ふたりをたずねると、錦峯の「書付」⁴⁹⁾を提示される。

先日申達候通弥申合せ正学相励可申義勿論之事ニ候、乍去面々見込も有之者ニ候得ハ、我等家学存念之不叶義も有之ましきとも難申候、門人之内左様ニ存込候者も有之候ハ、勝手次第、門人名面相除可遣候間、無遠慮可申出候、尤此義ニ付聊隔意有之候義ニ而ハ無之候、但シ当時其儘ニ而罷在内々異学をもいたし候趣、追而於相聞而ハ、屹度取扱方有之候間、兼而其旨申聞置候

申達のとおり、「正学」に精励することはいうまでもない。林家の「家学」に専修できないものは、みずから申し出、退塾すべきである。門人の身分のまま、内密に「異学」をまなぶものがいれば、除籍に処する。昌平黌から「異学」を徹底的に排除するという錦峯の決意を

読みとることができる。西河は、6月27日付で聖堂学頭安原三吾と林家学頭片瀬作右衛門に書簡をおくり、「此度祭主様ヨリ学流之義被仰渡委曲承知候私義何之異見無御座候」と回答する。昌平黻において朱子学を「正学」と位置づけ、「異学」を講じるだけでなく、まなぶことも禁ずるという方針について異存がないと返答する。

申達が出された直後から、在野の儒者から批判がだされる。のちに「寛政の五鬼」と呼ばれる儒者のひとりであり、江戸で雄風館をいとなんでいた^{つかだたいほう}冢田大峰は、松平定信に3度上书し、「唯今まで博く古書に随て其道を信仰仕候輩は、内々一統に慷慨嘆息仕候沙汰に相聞へ申候」⁵⁰⁾と訴える。それは、学問を朱子学「一統」に統制することに異議を唱える市井の儒者の声である。錦峯の「書付」は、こうした批判にたいし、毅然として方針をつらぬくことを宣言したものである。寛政正学派のひとりである尾藤二洲が、大坂から招請され、寛政3(1791)年9月に幕府儒者を命じられたのは、在野からの批判に対応するためだけでなく、「正学」論を補強するためでもある。二洲は、伊予川之江の庶人の出の、大坂の浪人儒者にすぎない。

西河は、出府した「寛政戊の歳」、旧師栗山と再会する。栗山は、徳島藩に仕えたのちにも京都を生活基盤としていた。京坂では、栗山が京都に帰った安永9(1780)年ころにはすでに朱子学に回帰する流れが生まれていた。那波魯堂は、「専^ラ治^メ漢魏^ノ古学^ニ」⁵¹⁾ていたが、宝暦年間(1751~1764)には「左^ニ袒宋学^ニ。専^ラ唱^ニ性理説^ヲ」⁵²⁾ようになる。さらに「唱^ニ洛閩^ノ学^ニ於世^ニ。自^ラ以^ニ正学^ニ居^ル。指[・]伊仁齋物徂來宇明霞之徒^ニ為^ス異端之魁^ト」。宋学を首唱し、みずから「正学」として奉侍する。伊藤仁齋、荻生徂徠、宇野明霞を「異端」の首魁とみなす、それが魯堂の回帰後の思想的見解である。晩年、徳島藩主蜂須賀治昭に仕え、徳島に移る。魯堂の門人西山拙斎は、親交のある栗山に朱子学正学論を説き、「異端」排除の構想をしめす⁵²⁾。備後神辺の菅茶山は、那波魯堂に師事し、兄弟子の拙斎、頼春水らと交友する。大坂では、徂徠派詩文派の片山北海の門にいた頼春水、尾藤二洲、古賀精里が朱子学攻究のグループをつくり、栗山や拙斎とも交流をもつ。京都や大坂において結集した朱子学に回帰しようという人びとが異学の禁の基盤をととのえていた。

栗山は、天明8(1788)年、老中松平定信に招かれ、岡田寒泉とともに大学頭林錦峯を補佐し、寛政2(1790)年5月、異学の禁を実施する。異学の禁において中心的な役割を演じた栗山によれば、正学は、「孔孟之所説」のなかでも「程朱之所伝」、すなわち宋代の儒学者、程顥と程頤の二兄弟と朱熹がつたえる学説でなければならない⁵³⁾。正学は「学問」であると同時に、「倫理」でなければならない。個々の道德実践にとどまらず、社会的な倫理的な価値の実践におよぶのが、「正学」である。

昌平黻では、寛政5(1793)年9月、幕府の申達書にもとづき「学規五則」をさだめ⁵⁴⁾、「正学」の具体像を明示する。第1に「修業」については、「敗俗非聖之書」(風俗を乱す書)

と「新奇怪異之説」を禁じる（「三曰修業」）。会読においては、「義理」を討論し、「精微」を講窮しなければならない。すべて「依拠」がなければならず、「無稽憶説」を禁じる（四曰講会）。第2に、「人才取立」については、昌平黌は「育材首善之地」（人材を育成し、善をはじめる場）であり、「教化」の淵源である（「二曰行儀」）。門生は、「篤実」で、「謙讓」でなければならない。「必信」（信頼がおける）、「必禮」（礼をわきまえる）でなければならない。「勿議國政」（国政を議することない）、「勿失成憲」（法度をやぶることない）といった人物でなければならない。栗山が「宋學ノ中興」とみなされる⁵⁵⁾のは、儒学が学問的な方法論の対象とみなされる風潮のなかで、道德的修養を再評価する正学朱子学を幕府学問所に制度化する過程において主導したからである。

西河は、幕府儒者の栗山と面談する。寛文2（1790）年の4月以降のことである。養父白鹿は、14歳年下の栗山とは3、4年、昌平黌でともにすごす。白鹿は、毎夏、日光の諸院で經書を講じていたが、後任に栗山を推薦する。白鹿は、松江城下にうつったのちにも、書通をたやすこともなく、還暦には栗山から寿詞をおくられる。西河にとって、栗山は昌平黌の先輩であり、師でもある。西河は、江戸勤番のさい栗山から聞いた話をしるす⁵⁶⁾。

寛政戊の歳東都に往きし時、柴栗山の物語りに、今の学者に蔽あり。其一は新奇の説を發し、人の耳目を驚かさんとす。其一は好んで国政を議し、賦税収斂のことに及ぶ。皆今の蔽なり。只学者は徳行を教へ、風俗を維持すべし、是れ学者の要務なりと。余心中謂へらく、新奇を屏けて風俗を持するの二事は的当せり、国政を議せずと云ふは未だ当たらずと。今經義を以て折衷して、右の条にある如く意を定めたれば、始て先覚の見解に感ぜり。今是を書して謝罪に当つ。重ねて東游せば、面あたり栗山先生に語るべし。

現今の儒者は、弊害を撒き散らす。ひとつは、「新奇の説」をとえ、注目をひこうとすることである。もうひとつは、「国政」を論じ、「賦税収斂」までも説き及ぶことである。「国政」を論じるのは、徂徠、その門人太宰春台だけでなく、反徂徠の急先鋒の中井竹山も松平定信の要請に応じ、上書を呈し、「運上」、すなわち町人への課税にも言及する⁵⁷⁾。儒者の本分は、「徳行」を教え、「風俗」を維持することである。栗山は、昌平黌の改革にたずさわる立場、すなわち徂徠の学説を「異学」とみなす立場から常套的な言葉でかたる。西河は、儒者が「新奇の説」をとえることが風紀を紊乱するという栗山の主張を是認するが、「国政」を論じることを非とする所論には合意できなかった。瀧水はもとより、養父白鹿も、藩政改革にたずさわる家老朝日郷保の諮問にこたえていた。西河は、のちに經義を涉獵し、栗山の真意を理解する。西河は、京都、江戸に遊学し、多くの儒者の教えをうけるだけでなく、昌平黌でも研鑽をつむが、徂徠の言説について、じゅうぶんに理解しているとはいえない。朱子学に異議を唱える徂徠の言説への理解が深まるにつれ、朱子学への理解も深まる。

異学の禁の申達書は、幕臣の林家にくだされたものである。諸藩の藩校や民間の私塾を対

象にしたものではない。松江藩は親藩である。西河は、その藩校の教授の後継者とみられる。西河が、みずから林家におもむき、すでに民間に流布していた異学の禁の深意を尋ねたとも考えられる。西河が、林家から呼び出され、異学の禁について意見をもとめられたとも考えられる。桃家に個人的に親近感をもつ栗山の配慮が窺われる。

Ⅲ. 正学・異学

1) 性理の学

西河は、寛政5（1793）年に3年間にわたる江戸勤仕をおえる。帰藩後は、白鹿のもとで助教をつとめながら修業をつづける。享和元（1801）年8月に白鹿が亡くなると、「百式拾石」の俸禄をひきつぎ、「大御番組」に組みこまれる。10月には明教館の教授職をうけつぎ、「学授料銀拾枚」をくだされる。「御文庫御書物」の管理もゆだねられる。西河は、文化7（1810）年8月に亡くなるまで教授職にあったが、西河がどのような儒学を講じたか、『座臥記』からその概要を窺い知ることができる。『座臥記』は、西河が天明4（1784）年から寛政11（1799）年までの16年間に書きとめた183条からなる仮名文の随筆である。「右仙石怡君と談ず」、「二月七日字明卿と話す」といった会話を書きとめたものもみられる。

西河は、宋学の中核である性理学について記す⁵⁸⁾。

学者全く要議時。余曰く、是れ肝要の事なり。程朱宋の礼楽刑政、聖王と合せざるを知り、又程朱の時、宋の盛んなる時に非ざれば、就中王道と反すること多き故に、事の弊を救ふことを考え、人を正しきに導くことを慮るれども、其身に宰輔の位も無ければ、政を以て民を化すべき術なし。因て孟子の性善に本づき、礼の楽記の天理人欲の説を推广めて、性理学を唱へらる。誠に時を識ると謂うべし。政は一統に人を化する者なり。政無ければ教を以て、一人一人を化するより外に術無し。性理の学行はれて、是に化せられたる人多し。宋の亡ぶるに至つて、節を守り義に死したる人は、皆程朱の門より出でたる人なり。然れば性理学の功大なり。

西河は、まず性理学が生まれた経緯をたどる。宋王朝は、対外的には北方異民族の脅威、対内的には新法派と旧法派の政争により疲弊し、その「礼楽刑政」、すなわち政治的・文化的な諸制度は古代において徳をもって天下を治めた聖王の時代とはかけはなれていた。北宋（960～1127）の二程、すなわち程顥と程頤は、治世の乱れによる風俗の紊乱を目の当たりにし、「人を正しきに導く」方策に思いをめぐらす。かれらは、宰相の地位にないために政治によって人民を導くことはできない。かれらは孟子の性善説を基盤とし、『礼記』楽記篇の「天理人欲」の説を普遍化し、「性理学」をとる。政治にたずさわることができなければ、教説によって人民を感化するより方法はない。しかし、二程が宰相王安石の急激な改革に反対したために、二程の学は禁じられる。南宋（1127～1279）の朱熹は、二程などの北宋の思想

家に私淑し、性理学を集大成する。朱熹は、科挙官吏として地方官を歴任する。晩年、皇帝の顧問官に抜擢され、『大学』などを進講し、国政にみずからの理想を実現しようとする。しかし、宰相の韓侂胄かんたうけうの策謀により地位を追われ、朱熹の学説は偽学として弾圧される。性理学は、「政を以て民を化すべき術」をもたない程朱が言説をとおり、「一人一人を化する」ために生まれたものである。

「天理人欲」の説は、つぎのような説である⁵⁹⁾。

人生^{レテ}而静^{ナルハ}、天之性也、感^{ジテ}於物^ニ而动^{クハ}性之欲也<中略>人化^{セラル}、物^ニ也者、
減^{シテ}天理^ヲ、而窮^{ムル}人欲^ヲ者也

すなわち「人生まれて安靜なるは是れ天性なり、外物に感觸して動くは性の欲望なり<中略>人が外物に化せらるゝときは、天性を減して私欲を窮むるに至る」という説である。「天理人欲」の説は、性善説に立脚する。

朱熹は、「心」のはたらきを「性」と「情」に分ける⁶⁰⁾。「情」は気であり、人間が経験する「心」の動きである。「性」は「心」の動きの法則・秩序、すなわち理である。「性」のとおりに、秩序にそって「心」が動いているときに善である。「気のエネルギーの歪み」により、「性」のとおりに「心」が動いていないときに悪が生まれる。「気のエネルギーの歪み」は、人欲により生じる。「気のエネルギーの歪み」を修正するためには、学問と修養が必要である。漢唐の訓詁学的経学は、朱熹により「性理学」に再生され、「氣質の性」を「本然の性」へとかえることを課題とする倫理思想へと変質させる。「本然の性」は、天地万物の主宰者である「天」が人間や万物にわりつけたものである⁶¹⁾。西河は、朱熹の学説は「人の耳目を驚かさん」とするものではなく、「学者全く要議時」、すなわち時代の要請により生まれたものにほかならないと考える。

2) 徂徠説批判

異学の禁の年に栗山と面談して以来、西河は儒者と「国政」の関わりについて思索していた。それは、荻生徂徠の言説、とりわけ「先王の道」説について考察することでもある。

徂徠は、朱子学が「経書の正確な解釈をなおざりにし、そこに盛り込まれた聖人の教えを誤解歪曲した」と主張する⁶²⁾。第1に、徂徠は「経書の正確な解釈」のために古文辞説をとり入れる。徂徠は、寛文6（1666）年に江戸に生まれ、寛文12（1672）年、林家2代鷲峰の時代に上野忍岡の林家塾に入門する。延宝7（1679）年、父方庵が蟄居の身になり、徂徠も上総長柄にうつる。元禄3（1690）年に江戸に帰り、徂徠は芝増上寺門前に住み、宋代以降の新注により「今文経書」を読み、朱子学を講じる。当時、朱子学的儒学の道德中心的な考えが人びとの心を支配していた。元禄9（1696）年8月、徂徠は5代將軍綱吉の側用人柳沢吉保の「文学の臣」に登用され⁶³⁾、柳沢藩邸にうつりすむ。宝永2（1705）年ころ、「天の寵

「靈」により中国明代（1368～1644）の李攀竜^{りはんりょう}、王世貞というふたりの古文辞派の詩文にであう。古文辞派は、「文必西漢詩必盛唐」⁶⁴⁾、前漢の文、盛唐の詩を模範としなければならないと主張し、擬古主義の文学論を唱える。徂徠は古文辞派の文学論を「儒学説」に取りいれようとする⁶⁵⁾。「南郭」は、徂徠没後、古文辞派の文学説にもとづく擬古的な詩文を鼓吹し、「天下の学士」を「詩文」の世界にかりたてた徂徠門下の服部南郭である。「南郭」は、徂徠の詩文・文学の側面、すなわち「文雅」の世界をうけついでにすぎない。徂徠は、古文辞派の文学説を経書解釈に応用しようとする。

徂徠は、「忽而學問の道は文章の外無之候。古人の道は書籍に有之候。書籍は文章に候。能文章を會得して。書籍の儘濟し候而我意を少も雜え不申候得ば古人の意は明に候」⁶⁷⁾と主張する。「古人の道」、古代の聖人が説いた道は「書籍」、すなわち紀元前6世紀の人である孔子が、既存の文献資料のなかから選択・編集したといわれる「六経」^{りつげい}に記載されている。聖人の道を明らかにしようとするれば、宋代の新注だけでなく、唐漢代の古注も捨て、聖人の事蹟を記した「六経」、実際には五経と、孔子の言行や弟子、諸侯との対話を記した『論語』そのものを精密に読まなければならないと徂徠は説く。徂徠は、「六経」について述べる⁶⁸⁾。

孔子は、平生、東周をなさんと欲す。その、弟子を教育し、おのおのその材を成さしむるは、まさに以てこれを用ひんとするなり。そのつひに位を得ざるに及んで、しかるのち六経を脩めて以てこれを伝ふ。六経はすなはち先王の道なり。故に近世、先王・孔子とその教へ殊なり<中略>思・孟よりしてのち、儒家者流立ち、すなはち師道を尊ぶを以て務めとなし、妄意すらく、聖人は学んで至るべし、すでに聖人となるときは、すなはち挙げてこれを天下に措かば、天下自然に治らんと。

儒教の祖孔子は、封建的氏族秩序が崩壊し、周室の權威が衰微する東周前期の春秋時代に魯に生まれる。孔子は、魯に仕え、東周のような理想的な国をめざすが、うけいられず、55歳ころに致仕する。その後、多くの門人を引き連れ、14年間、70あまりの国を歴訪し、遊説する。晩年、魯にかえり、教育と著述に専念する。孔子以前の堯舜から周王朝成立にいたる理想的社会では、『詩経』以外はテキスト化されず、儀礼などは実践によって継承されていた⁶⁹⁾。「六経」、すなわち易、書、詩、礼、楽、春秋は、孔子が弟子とともに収集し、編纂したものであるといわれる。徂徠は、「六経」には「先王の道」が記されると考える。「六経」は秦の焚書により消失するが、漢代に復元される。『楽経』は散佚し、のこる5種が五経と呼



徂 徠 生 萩
図 6 荻生徂徠肖像⁶⁶⁾

ばれる。漢代に当時の通行字体である隸書に書き写された経書は^{きんぶんけい}今文経と呼ばれる。孔子の旧宅の壁中などから発見された秦代の篆書、^{ちゆうふん}籀文で写された経書は^{こぶんけい}古文経と呼ばれる。唐の太宗李世民的時代（598～649）には『五経正義』が編述され、五経のテキストが定められる。漢以来の註釈を選択し、その註釈に解説がほどこされる。それが五経の正統公認の解釈集成である。テキストが経、注釈が注、その解説が疏と呼ばれる。『五経正義』以前の注釈は古注と呼ばれる。

徂徠によれば、「思・孟」以降の儒者は孔子の思想を祖述することにつとめる。「思」、孔子の孫の子思は『中庸』を著したといわれていた。「孟」、孟子は孔子の孫の子思の門人にまなび、「聖人の民に於けるも、亦類也」（聖人之於^{タグヒ}民。亦類也）⁷⁰⁾と明確に聖人と民の同質性を認める。徂徠によれば、そのひとりである朱熹は「聖人可学而至」⁷¹⁾という「妄意」をいなく。「聖人は学んで至るべし」は、道德的修養をつむことにより聖人になるという意味である。道德的修養をつんだ聖人が統治すれば、天下が自然におさまるという主張である。徂徠は、「先王・孔子とその教へ」を歪曲した「思・孟」以降の経書を排斥し、「六経」だけに儒家古典としての価値をみいだす。徂徠が「六経」という呼称に執着したのは、漢代以降の五経ではなく、「先王・孔子とその教へ」に遡るという主張をつらぬくためである。

徂徠の時代には、訓点本が多くなり、長崎に舶載される無点白文の唐本を読むことができない儒者も少なくなかったが、徂徠は漢文読解の能力に卓越してただけでなく、博識でもあった⁷²⁾。徂徠は、豪語する⁷³⁾。

程朱の諸公は、豪傑の士なりとはいへども、古文辞を識らず。ここを以て六経を読みてこれを知ること能はず。ひとり中庸・孟子の読み易きを喜ぶや<後略>

程朱学に帰依する皆さんは、古文辞の造詣がない。「六経」を読み、その内容を理解することはできますまい。中庸、孟子だけが読み易いとおよろこびのようだが。徂徠は、朱子学を信奉する人びとに「学んでむしろ諸子百家曲芸の士となるも、道学先生たることを願わず」（學事爲_レ諸子百家曲藝之士_一、而不_レ願_レ爲_レ道學先生_一）⁷⁴⁾という挑発的な言辞をなげかける。こうるさい道德主義者になるよりは、雑学舌先三寸の士になったほうがましである、という侮蔑の言葉である。高慢な弁舌は、徂徠批判を増幅させる。

徂徠は、古文辞について述べる⁷⁵⁾。

古言を識らんと欲せば、古文辞を学ぶに非ずんば能はざるなり。前漢は孔子の時を去ることいまだ遠からず。<中略>博く秦漢より六朝に至るまでの書を読み、熟読玩味して以てこれを求めば、或いはこれを^{ちか}得るに庶きかな。

先王の古言を知るには、「秦漢より六朝に至るまでの書」を読み、熟読玩味し、古言を自由自在につかひこなさなければならない。徂徠は、古言・古文に習熟するために、擬古文を作成したり、擬古主義的な詩文をつくったりする。護園詩文派の擬古的詩文が生まれる。この

擬古的詩文は、京都遊学中の本居宣長を惹きつける。

第2に、徂徠は「六経」読解に専念し、享保期（1716～1736）になると、その成果として『弁道』、『弁名』をまとめ、朱子学に馴染んだ儒者にとって新奇な学説を唱える⁷⁶⁾。

先王の道は先王の造る所なり。天地の道に非ざるなり。けだし先王、聰明睿知^{えいち}の徳を以て、天命を受け、天下に王たり。その心は、一^{いつ}に、天下を安んずるを以て務めとなす。

徂徠は、「先王の道」、すなわち「先王の造る所」であり、「天地自然の道」ではない。しかも、「先王」は「聰明睿知の徳」を賦与され、「天命」により「天下」に君臨する。「先王」は、「天下を安んずる」という使命をになう。徂徠は、「先王の聰明睿知^{えいち}の徳は、これを天性に稟く。凡人の能く及ぶ所に非ず。故に古者は学んで聖人となるの説なきなり」と朱熹の言説に反駁する⁷⁷⁾。さらに、「命^{なづ}けて聖となす所の者は、これを制作の一端に取るのみ。先王、国を開き、礼楽を制作す。これ一端なりといへども、先王の先王たる所以は、またただこれのみ」と言立てる。先王の徳は天稟のものである、凡人が修養したとしても、手が届くものではない、と説く。「聖人可学而至」という説は朱熹がつくりだした妄説にすぎないと断言する。先王は、国をひらき、「礼楽刑政」を「制作」する。礼楽刑政は、「儀礼と習俗・文化、政治と法・制度を包括する人間の社会的・文化的体系」である⁷⁸⁾。先王が「聖人」と尊称されるのは、「天下を安んずるの道」、制度体系を「制作」するからにはかならない。徂徠における道は、先王、すなわち中国古代に実在した諸王が「制作」した制度体系としての「礼楽刑政」である。

仁斎や徂徠が登場するまで、性理学という形而上学的な思弁的要素をもつ朱子学が支配的な思想・学問体系として存在していた。徂徠説は、朱子学のアンチテーゼとして提示されたものである。朱子学では、第1に、「道」は「天下を安んずるの道」ではなく、「事物當然之理」である⁷⁹⁾。

道とは、事物当然の理なり。苟も之を聞くことを得れば、則ち生きては順い死しては安く、復た遺恨無し。朝と夕とは、甚だしく其の時の近きを言う所以なり（道者。事物當然之理。苟得聞之。則生順死安。無復遺恨矣。朝夕。所以甚言其時之近）

「四書集注」以来、「道」は「倫理的・道徳的な真理」ととらえられる⁸⁰⁾。『論語』も、新注により「道徳主義的色彩」を色濃くおびる。

第2に、「聖人可学而至」という説は、宋学の基本的なモチーフである。唐代の文人思想家として知られる韓愈によれば⁸¹⁾、「古之時」、人の生活には苦難が多かった。そこに「聖人」があらわれ、「相生養之道」（相い生き養うの道）をおしえた。かれらのために「君」となり、「師」となり、礼楽刑政をさだめる。古に「聖人」があらわれなかったら、「人之類」はすでに滅亡していたであろう。唐代の「聖人」は人間の「君」として、「師」として礼楽刑政をさだめる。「聖人」は、人間とは異次元の神のような存在であった。

宋代になると、北宋の程伊川は「學^レ以至^ル聖人^ニ之道」（学問は聖人の境地に達する道）である、「聖人可^キ學^テ而至^ル」（学問修業により聖人の境地に到達することができる）と述べ⁸²⁾、「聖人」の境地は天賦のものであるという唐代の説を否定する。二程に私淑する張横渠は、人間がめざすべき理想は、「聖人」ではなく、「君子」とであると説く⁸³⁾。南宋の朱熹は、北宋の新しい学風を継承展開させ、「聖人。神明不測之號。君子。才德出衆之名」⁸⁴⁾という「聖人」像を提示する。「聖人」は、神のような徳のはかりしれないものの称号である。「君子」は才徳が衆庶に抜きん出ているものの呼称である、という。宋学においては、人間がめざすべき理想は、「聖人」ではなく、人間のなかでも才徳をそなえた「君子」である。「君子」になるための努力を修身という。

朱子学、とりわけ寛政改革期（1787～1793）に体制教学として幕府に認知された「正学」は、徂徠の言説にたいする批判をとおり、朱熹の学説に混じり込んだ異質な要素を排除することによって、幕府直轄の昌平坂学問所に取りこまれた正学朱子学である。寛政正学派のひとり尾藤二洲は、少年期に生地伊予川之江にまで浸透した徂徠派の洗礼をうける。24歳のころ京坂に遊学し、たまたま『護園隨筆』をよみ、「物氏之説」に疑念をいだく⁸⁵⁾。『孟子』を熟読するうちに、徂徠が主張する「古」が「古」ではないこと、「新奇の説」ではないかと思うようになる。二洲は、やがて確信する⁸⁶⁾。

彼既辯博。意氣足以翕張一時俊英。於是高自夸許。無復所顧慮。乃敢造作新奇易人之言。以倡道之。道者先王所造。及聖人不可學而至等之説。是其最綱要者。

徂徠は、博識で弁才があり、一時、驥足をのばし、みずから驕り高ぶり、傍若無人にふるまう。わざわざ「新奇」をつくりだし、古人の言葉を歪曲し、唱導する。「道は先王の造る所なり」、「聖人は学んで至るべからず」といった説は、「新奇」の極致である。

二洲の盟友の頼春水は、徂徠が「道」の概念を混乱させたという⁸⁷⁾。

風－俗之漸靡薄。其可^キ歎^ス乎。風－俗之漸靡－薄。由^ニ道之不^レ明也。道之不^レ明。由^ニ學之不^レ正也。道也者何。倫理也。學也者何。明^レ之^ヲ也。倫理之外無^レ道。明^レ之^ヲ外無^レ學。奚以^ニ嘖嘖^ニ。為^ニ尚有外^レ之學^ヲ者者。正學之名。於^レ是乎立焉。夫學有^ニ正雜之名^ニ。抑末也。雖然ト。風俗之醇－醜。職此ニ之由。

徂徠は、「先王の道は、天下を安んずるの道なり」⁸⁸⁾と述べ、政治が「道」の本質にはほかならないと主張する。「道」が明確にされないために「風俗」が靡薄になる。「道」が明確でないのは、「学問」が「不正」であるからである。「道」は「倫理」にほかならない。「学問」は、「道」をあきらかにするものである。「倫理」のほかに「道」はなく、「道」をあきらかにするのは「学問」のほかにはない。「道」、すなわち「倫理」を排除し、「学問」とするものもいるが、そうした異説が「正学」の名称をなりたたせる。「学問」が「正」と「雜」にわけられるが、「風俗」の「醇－醜」、「風俗」が純粹か夾雜物がまわりついているかは、もっぱら

「学問」による。

朱子学は、宋という時代に儒者が知恵をふりしほり、議論を戦わせるなかで絞りだされた「真理の集積体」である⁸⁹⁾。朱子学は体系的な思想である。朱子学を信奉するもののなかから、「新奇の説」は生まれない。朱子学の立場からは、徂徠説は儒学の範疇からはずれた異説にすぎない、という結論が導きだされる。

細井平洲、井上金峨、太田錦城のような折衷派や考証派の儒者も徂徠の言説を弾劾する。折衷派の祖のひとり片山兼山は、享保15（1730）年、上野平井村の農家に生まれ、17歳のころから江戸で徂徠派の鶴殿士寧^{うどのどねい}に師事する。のちに大学頭林鳳岡の門下の秋山玉山のもとでまなぶ。兼山は、士寧の周旋により宇佐美瀧水の養子になり、松江藩儒員になるが、やがて「徂徠の説」に「疑難」を生じ、養父に義絶される⁹⁰⁾。兼山は、安永4（1775）年、『山子垂統』を板行し、「物氏は古文辭を知るを以て自負すと云へども、古書の見やうは至て疎にして、何れの書の解し様も、みな糊椒丸呑なり⁹¹⁾」と指摘する。徂徠は、「古書」を読みこなしたと高言するが、古代文語文を精読したとは思われない。さらに、古典テキストの解釈も胡椒の丸呑みにすぎず、咀嚼・玩味し、真義に踏みこんだとはみられない。徂徠が「丸呑」したのは、漢唐の古注にほかならない。「丸呑」したのでは、古典テキストを理解したとはいえない。兼山は、漢唐の訓詁学をもとりいれ、「護園の學を攻撃するを以て、己が任と爲し」ていた。兼山は、「文献学的な実証性・客観性の不備」という徂徠の言説の核心にせまる⁹²⁾。

徂徠説にたいする文献学的な観点からの批判は、徂徠が実際に「六経」を読みこなすことができたであろうか、という点にむけられる。明代古文辞派は、文学的価値を探求し、前漢、盛唐の古文辞にさかのぼる。徂徠は「先王の道」をもとめ、「六経」を読みこなすためには「秦漢」までさかのぼらなければならないと述べている。「秦漢」は、紀元前3世紀以降の焚書の時代から経書の復元の時代である。「六経」は、紀元前6世紀の孔子以前の中国古代の文語体で綴られる。『書経』や『詩経』はとりわけ難解である⁹³⁾。『書経』は、堯・舜以下、夏・殷・周3代の帝王の言葉が記載され、春秋時代の穆公の言葉もおさめられる。「先王の道」をあきらかにしようとする徂徠は、『書経』はとくに熟読しなければならない。『書経』は、唐代中期を代表する文人韓愈をはじめとする中国歴代の学者や詩人のあいだでも難解なテキストとして知られるが、『書経』にも古注と新注がある⁹⁴⁾。唐話、すなわち現代中国語会話をまなんだとしても、難解な古代文語に近づくことはできない。

「よみ易い文体」が成立するのは、孔子の時代以後、紀元前3世紀に秦王朝が生まれるまでの戦国時代である。「よみ易い文体」は、「今世紀初までの中国の文章語の文体」である。中国では、考証学が乾隆・嘉慶年間（1736～1821）に全盛期をむかえる。考証学は、宋・明の儒学が経書の真意を曲解し、空理空論に陥りがちであったという反省から生まれる。清代の考証学は、直接、原文にかえるのではなく、漢・唐代の古注を研究対象とする⁹⁵⁾。実証的な

学問方法論、文献学的方法論は、徂徠の言説を検証し、徂徠の「六経」への古文辞学的アプローチによる成果に疑問をなげかける。徂徠が、「六経」の「古文辞」の「言語」を「獲得しようとした⁹⁶⁾」としても、古注を飛び越え、難解な「六経」原典にたどりつくことができるだろうか。徂徠は、古語を学習したことを強調するが、実証主義を装ったにすぎないともいえる。

西河は、徂徠の言説を吟味するにつれ、嫌悪感をいだくようになる⁹⁷⁾。

世を憂ふるの心なく、我が説を売らんとのみ思ふ人、猥りに宋学を撃破り、我が見解に誇るは、賢者の意を知らずと謂うべし。明儒の行き過ぎたる学者の功は、一二の難解の処を解し得たることもあるべけれども、風俗を乱り軽薄に流れ、其失大なり。学問は修身治国の道なり、自満高満の道に非ず。学ぶ者新奇を好み、名を貪ること勿れ。家に修身治国道と云ふことを知らば、自から此過は無かるべし。

徂徠は、「世を憂ふるの心なく、我が説を売らんとのみ思ふ人」であり、「猥りに宋学を撃破り、我が見解に誇る」人である。「我が説」、「我が見解」は、「新奇」をこのみ、「名を貪る」徂徠が創作した虚構にほかならない。儒者は、「一言一句も、皆修身治国の為にし、先王先師の法言を守」ることが責務である。徂徠のように「文雅風流奇異怪行」によって「時の風俗」をみだすことはゆるされない。西河の徂徠批判は、寛政正学派の人びとの見解を参酌したものである。西河は、徂徠の説は「先王の道を今に合せて、大公儀御法にも違わざる様を取捨して、終始を詳に論列する」ものにすぎないとも述べる。徂徠の「先王の道」は、「天下を安んずる」ために「先王の造る所」のものである。朱子学の「先王の道」は「天地自然の道」である。西河は、徂徠独自の用語、「先王の道」の概念を否定するのではなく、そのまま鵜呑みにし、古代の礼楽刑政を幕府法制に齟齬しないように改竄したことが徂徠説の欠陥であるとみなす。西河は、独自の視点から徂徠の言説に切り込むことはなかったが、徂徠の言説を否定することによって、純化された朱子学、いわゆる「正学」にむかう。

おわりに

桃^{せいか}西河は、京都や江戸に参集する「諸儒学流」の人びとに師事したり、面談したりする。修業の最終的な段階においては、松江藩校の初代教授である養父白鹿と同様に昌平黉で研鑽し、勤番でおもむいた江戸では異学の禁に遭遇する。「学派維持之儀ニ付申達」がくだされた翌月、寛政2（1790）年6月、西河は大学頭林錦峯をたずねたさい、昌平黉では「正学」を精励し、「新奇之学流」を排除するという錦峯の決意を知らされ、「私義何之異見無御座候」とつたえる。昌平黉は、諸藩からだけでなく、市井からも門生をうけいれ、林家を総帥とする全国的な儒学ネットワークを形成する。西河も、全国的な儒学ネットワークのなかで、各地に拡散した門生とのあいだに、つよい同門・同窓意識を共有する。

西河は、勤番のために東上した年、異学の禁において中心的な役割を演じた柴野栗山と面談し、異学の禁の意義について見解を聞く。京都遊学中の西河の旧師栗山によれば、「正学」は「孔孟之所説」のなかでも「程朱之所伝」、すなわち宋代の儒学者、程顥と程頤の二兄弟と朱熹がつたえる学説でなければならない⁹⁸⁾。「正学」は「学問」であると同時に、「倫理」でなければならない。栗山の「正学」論、尾藤二洲も起草にかかわった寛政5（1793）年の「学規五則」における「正学」像は、松江藩儒者西河の原点になる。

西河は、儒者の職分は「学問」に専念することであると述べる。「学問」は「徳を修むる為にすること」である。みずから道徳的修養をつまなければならない。徂徠のような「不徳なる人」に従学すれば、「不徳」に陥る。教職にたずさわる儒者は、「文字を校正し、経解の異同を考へ」、経書テキストの誤りをただし、経書解釈における諸説の異同を考察しなければならない。講釈にさいしては、「一言一句」も「修身治国」に焦点化し、「先王先師の法言」をまもり、「時の風俗」を乱すような言動は慎まなければならない。西河は、独創性がある思想家ではなく、「風俗を維持」するために「徳行を教へ」る藩校の儒者である。昌平黌朱子学は、徂徠説は儒者の思想の枠からはずれた異端の言説にすぎないという認識から醇化された「正学」である。桃西河は、松江藩校に「正学」としての朱子学を移植し、根付かせようとする。

西河の没後、嫡子の黄園が教授職をつぐが、早世する。文化14（1817）年以降、園山西山、原田良助、原田新助といった儒者が教授職をつぐ。かれらは、いずれも徂徠派の儒者とみられる⁹⁹⁾。かれらが徂徠の門流に師事したり、昌平黌・昌平坂学問所でまなんだ形跡はみられない。嘉永元（1848）年、教授職は桃家にもどり、黄園の嫡子の翠庵が教授職につく。桃家4代の翠庵は、寛政9（1797）年に昌平黌から改称した昌平坂学問所でまなぶ。しかし、松江藩が藩校を「朱子ノ学派」に統一することを決定したのは、万延年間（1860～1861）、10代藩主定安の時代である¹⁰⁰⁾。文久2（1862）年、松江藩校では、「内規」にもとづき、10級の「学則表」が制定される¹⁰¹⁾。「内規」により、「昌平黌」モデルの移植が本格化する。廃藩置県の10年まえのことである。

【註】

- 1) 「兼山秘策」第7冊、滝本誠一編、『日本経済叢書』巻2、日本経済叢書刊行会、大正3年、617頁。「兼山秘策」は、金沢藩儒者の青地兼山、麗沢兄弟が、師の室鳩巢から寄せられた正徳元（1711）年から享保16（1731）年までの書簡を年代順に編集したものである。
- 2) 谷口廻瀾、『島根儒林傳』、飯塚書房、昭和52年覆刻（昭和15年初版）、92～93頁。
- 3) 湯浅元禎、『文会雜記』、日本随筆大成編輯部編、『日本随筆大成』第1期14巻、吉川弘文館、2007年（1993年初版）、170頁。
- 4) 前田勉、「林家三代の学問・教育論」、『日本文化論叢』巻23、2015年3月、39頁。

- 5) 井波律子,『完訳論語』,岩波書店,2016年,366頁。
- 6) 佐野正己,『松江藩学芸史の研究』,明治書院,昭和56年,218頁。
- 7) 「桃白鹿」,島根県立図書館編刊,『松江藩列士録』第6巻,2006年,421頁。
- 8) 島根県学務部島根県史編纂掛編,『島根県史』第9篇 藩政時代下,島根県,昭和5年,529頁。
- 9) 松平直亮編刊,『松平安定公伝』,昭和9年,付図。国立国会図書館デジタルコレクション。文久年間(1861~1864)の城下絵図。中央南の「三御丸」東に「文武館」がある。「文武館」北の街路を2辻東進し,「小倉」の角を北進すると,5軒目が「桃」家である。宝暦8(1758)年,桃家の敷地内に長屋が建てられ,文明館と呼ばれる。文久年間には,城下に散在していた種々の教場が「文武館」に集約される。慶応元(1865)年,修道館に改称される。
- 10) 「原田周助」,『松江藩列士録』第1巻,2004年,314~315頁。
- 11) 原徳斎,『先哲像伝』第1集,裳華書房,明治30年,74頁。国立国会図書館デジタルコレクション。
- 12) 「桃西河」,『松江藩列士録』第6巻,421~422頁。
- 13) 桃西河,『座臥記』,森銑三・北川博邦編,『続日本随筆大成』,吉川弘文館,昭和54年,224頁。
- 14) 「老学自叙」,室鳩巢,『駿台雑話』仁集,中村直道(写),文化12(1815)年。
- 15) 岡千仞,『在臆話記』第三集巻六,森銑三他編,『随筆百花苑』第二巻,中央公論社,昭和55年,21~22頁。
- 16) 「解説」,清水茂校注,『童子問』,岩波書店,2001年(1970年第1刷),283頁。
- 17) 中村春作他著,『皆川淇園・太田錦城』,『叢書日本の思想家』26,昭和61年,25頁。
- 18) 同上書,54~55頁。
- 19) 『座臥記』,193頁。
- 20) 揖斐高,『江戸幕府と儒学者 林羅山・鷲峰・鳳岡三代の闘い』,中央公論新社,2014年,82頁。
- 21) 干河岸貫一編,『先哲百傑伝』本編,博文堂,明治33年,19~191頁。
- 22) 立原翠軒宛書簡,柴野栗山,『栗山手簡』,寛政学院,昭和15年,2~3頁。
- 23) 「林鳳岡」,原念斎,源了圓・前田勉訳注,『先哲叢談』,平凡社,1994年,48~49頁。
- 24) 中野三敏,『十八世紀の江戸文芸』,岩波書店,2015年,28頁。
- 25) 那波魯堂,岸上操編,内藤耻叟校訂,『學問源流』少年必讀日本文庫第六編,博文館,明治24年,23~24頁。
- 26) 「儒林評」,日田郡教育会編刊,『淡窓全集』中巻,大正15年,1~2頁。
- 27) 原念斎・東条琴台,『先哲叢談』後編,東学堂,明治25年,32頁。
- 28) 衣笠安喜,『近世儒学思想史の研究』,法政大学出版局,2005年(オンデマンド版),163頁。
- 29) 谷壮太郎編,『新編先哲叢談』巻之1,江島喜兵衛,明治17年,7丁。
- 30) 加地伸行他,『皆川淇園・太田錦城』,明德出版社,昭和61年,218頁。
- 31) 「天愚孔平(萩野喜内)とその周辺」,『松江藩学芸史の研究』,452~459頁。
- 32) 「天愚孔平伝」,滝沢解,『曲亭雜記』巻第4下,渥美正幹,明治23年,7頁。
- 33) 原義胤編,『先哲像伝・近世畸人伝・百家琦行伝』,有朋堂書店,大正11年,663頁。国立国会図書館デジタルコレクション。
- 34) 青柳文蔵,『続諸家人物志』中,北沢貞助,文政12(1829)年。
- 35) 干河岸貫一編,『先哲百家伝』正編,青木嵩山堂,明治43年,238~240頁。
- 36) 大日向克己,「雲州本『延喜式』の改訂と藍川慎」,『社会文化論集』第11号,2015年3月,30頁。
- 37) 『続諸家人物志』中。
- 38) 関山邦宏他,『「升堂記」(東京大学史料編纂所蔵)翻刻ならびに索引』,1997年,60頁。
- 39) 東京帝国大学史談会,『旧事諮問録』,青蛙房,昭和39年,314頁。
- 40) 「宇佐美瀧水碑」,谷口廻瀾,『島根儒林傳』,飯塚書房,昭和52年覆刻(昭和15年初版),5頁。
- 41) 「朱学維持ノ儀林家へ達」,菊池駿助纂修,『徳川禁令考』第14巻,司法省,明治15年,62~63丁。読点筆者。
- 42) 『十八世紀の江戸文芸』,49頁。
- 43) 同上書,64頁。
- 44) 「修身録」,松平定信,『楽翁公遺書』上巻,八尾書店,明治26年,5頁。
- 45) 同文館編輯局編,『日本教育文庫』学校篇,同文館,明治44年,308頁。国立国会図書館デジタルコレクション。
- 46) 森川潤,「寛政正学派の転向」,『広島修大論集』61巻1号,2020年9月。

- 47) 近藤守重編、『憲教類典』四ノ八、聖堂学問武藝、写。読点筆者。
- 48) 犬塚遜、『昌平志』第 1 巻、文政元（1818）年。国立国会図書館デジタルコレクション。林家 3 代鳳岡の時代に上野忍岡の林家邸内の聖堂が湯島にうつされ、元禄 4（1691）年に竣工する。右、高仰門から入徳門をのぼると聖堂、大成殿がある。左、正門の奥には学舎がある。
- 49) 「東都祇役要記」、『松江藩学芸史の研究』、394頁。読点筆者。
- 50) 「寛政異学禁関係文書」、史博書簡部、『日本儒林叢書』第 3 冊、鳳出版、1927年、22頁。
- 51) 『先哲叢談』後編、後210頁。
- 52) 「西山拙斎」、東条耕子蔵、『先哲叢談』続編 2、国史研究会、大正 6 年、271頁。
- 53) 「答大江尹」、柴野栗山、『栗山文集』巻之三、山城屋佐兵衛、天保13年。
- 54) 寛政 5（1793）年 9 月18日、「昌平志」巻第二、『日本教育文庫』学校篇、85頁。
- 55) 「儒林評」、『淡窓全集』中巻、1～2 頁。
- 56) 『座臥記』、248頁。
- 57) 中井竹山、『草茅危言』、経済雑誌社、明治27年、71頁。
- 58) 『座臥記』、154頁。
- 59) 「樂記」第19、「禮記」下、早稲田大学編集部編、『漢籍国字解全書』先哲遺著追補、第27巻、早稲田大学出版部、大正 3 年、195～196頁。
- 60) 土田健次郎、『江戸の朱子学』、筑摩書房、2014年、22頁。
- 61) 『中庸』、金谷治訳注、『大学・中庸』、岩波書店、1998年、141～143頁。
- 62) 日野龍夫、『江戸人とユートピア』、岩波書店、2004年、94頁。
- 63) 「解説」、吉川幸次郎・丸山真男・西田太一郎・辻達也校注、『荻生徂徠』下、岩波書店、2019年（1973年第 1 冊）、657頁。
- 64) 張廷玉等修、『明史』巻287、出版地不明、出版者不明、出版年不明。
- 65) 「徂徠学案」、『荻生徂徠』下、637頁。
- 66) 「口絵」、山路愛山、『荻生徂徠』、民友社、明治26年（「拾式文豪」第 3 巻）。
- 67) 「徂徠先生答問書」下、島田虔次編、『荻生徂徠全集』第 1 巻、みすず書房、1973年、471頁。
- 68) 『弁道』、吉川幸次郎・丸山真男・西田太一郎・辻達也校注、『荻生徂徠』上、岩波書店、2019年（1973年第 1 冊）、12頁。
- 69) 澤井啓一、「「古文辞学」から「古文系漢学」へ——近世日本における「漢学」の位相」、日本女子大学国語国文学会『国文目白』57、2018年 2 月、9 頁。
- 70) 「公孫丑章句」上、『孟子』（朱熹撰、「朱熹集注」）巻之三、和田已之助、明治15年。
- 71) 「滕文公章句」上、『孟子』（朱熹撰、「朱熹集注」）巻之五、和田已之助、明治15年。
- 72) 「解説」、『荻生徂徠』下、656頁。
- 73) 『弁道』、『荻生徂徠』上、11頁。
- 74) 『学則』、同上書、197頁。
- 75) 『弁道』、同上書、35～36頁。
- 76) 『弁道』、同上書、14頁。
- 77) 『弁道』、同上書、15頁。
- 78) 子安宣邦、『徂徠学講義 『弁名』を読む』、岩波書店、2008年、13頁。
- 79) 朱熹撰、『論語集註』1、『四書集註』、修道館、明治18年、15丁。
- 80) 井波律子、『完訳論語』、岩波書店、2016年、88～89頁。
- 81) 『原道』、韓愈撰、『韓文』巻之十一、昌平叢書、松山堂、明治42年序。
- 82) 朱熹・呂祖謙編、山崎嘉（闇斎）校、『近思録』巻之二、寿文堂（京都）、安永 3（[1774] 年）。
- 83) 同上書。
- 84) 朱熹撰、『四書集註』論語巻之四、煥乎堂、明治13年。
- 85) 「與村合田二老人書」、明和 9（1772）年 8 月28日付、尾藤二洲、『素餐録』、頼維勤編、『静寄軒集』（『近世儒家文集集成』第10巻）、ぺりかん社、平成 3 年、73頁。
- 86) 「答佐某書」、『静寄軒集』巻之五、78頁。
- 87) 頼春水、『正学指掌』序、天明 5 年、『静寄軒集』、279頁。
- 88) 『弁道』、『荻生徂徠』上、12頁。
- 89) 島田英明、『歴史と永遠——江戸後期の思想水脈』、岩波書店、2018年、98頁。

- 90) 「片山兼山」,『先哲叢談』続編2, 157～158頁。
- 91) 片山兼山,『山子垂統』前篇下, 井上哲次郎・蟹江義丸共編,『日本倫理彙編』卷之9, 育成会, 明治36年, 243頁。
- 92) 小島康敬,『徂徠学と反徂徠』, ペリかん社, 1994年, 201～223頁。
- 93) 吉川幸次郎,『漢文の話』, 筑摩書房, 2006年, 97頁。
- 94) 野間文史,『五経入門』, 研文出版, 2014年, 89頁。
- 95) 尾藤正英,『日本文化の歴史』, 岩波書店, 2000年, 181頁。
- 96) 吉川幸次郎,「徂徠学案」,『荻生徂徠』下, 632頁。
- 97)『座臥記』, 154～155頁。
- 98)「答大江尹」,『栗山文集』卷之三。
- 99)『松江藩学芸史の研究』, 305, 355, 359頁。
- 100)「學事上ノ諸制度」,「旧松江藩学校」, 文部省総務局編,『日本教育史資料』第2分冊, 富山房, 明治23年, 463頁。
- 101)「教則」,「旧松江藩学校」, 同上書, 467頁。

Zusammenfassung

Verpflanzung des Konfuzianismus durch
Seika Momo im Matsue-Clan

Jun MORIKAWA*

Seika Momo, der Nachfolger des Professors der Daimyatsschule in der Burgstadt Matsue, studierte in Kyōto und Edo, in der letzten Phase an der Shōheikō in Edo, die Lehrstätte von der Tokugawa-Shognat. Im Jahre 1790 sanktionierte die Shognatsregierung die Shushigaku als offiziell anerkannte konfuzianische Lehre. In demselben Jahre enthielt Seika für Dienst unabsichtlich in Edo, und sprach mit dem Direktor der Shōheikō Kimpō Hayashi und dem Shushi-Philosoph der Shōheikō Ritsuzan Shibano. Im Jahre 1801 folgte er die Professur nach, und die Vorlesungen hielt. In dieser Studie möchte ich aufgrund seiner Essay “Zagaki” untersuchen, welches Neokonfuzianismus in der Daimyatsschule vorlas.

* Professor Emeritus, Hiroshima Shudo University